

K2 南南東リブ単独登攀

山野井泰史



K2 頂上の筆者 (手前の酸素器具は韓国人のもの)



2000 年 (平成 12 年)
11 月号 (No. 666)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

目次

K2 南南東リブ単独登攀	1
幻の山・チョンムスターグ登頂記 3	
さんけんだより	4
報告	

青年部/山野井泰史氏講演会	6
医療委/登山医学の国際会議	6
海外連絡委/チャカルタヤへ	6
指導・集会委/第1回スポーツ	
ライミング講習会	7
アルバータ実行委/カナダの夏	
の総仕上げ	7
第17回全国支部懇談会	8
山の自然学研究会	8
フォトビデオク/秋季撮影会	9
山岳博物館散歩	7
海外の山	10
東西南北	
アルプス夏便り	11
秩父宮妃殿下のレリーフ	12
幕営者からマナーを学ぶ	12
俳句・富士吉田浅間神社の火祭	13
俳句・韓国五台山・小金剛	13
第1回ライチョウ会議	13
図書紹介	14
『妻と二人の山歩き(実践篇)』『輝けるとき	
の記憶・山と友Ⅱ』	
会務報告	15
INFORMATION	16
ルーム日誌	16
新入会員・図書受入報告	17

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10~20時
水・金……………13~20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10~18時
▶ ルーム年末年始休み……………
……………12月29日~1月8日

七年ぶりのバルトロ氷河のキャラバンは相変わらず長い道のりだ。それでも巨大な石ころが幾つもあり、緑に覆われている宿泊地のウルドカスはロッククライマーにとつてパラダイスである。正面にはキャシードラル、左はペットボトルのようなネームレスタワー、右にはとても尖った頂を持つロブスンスパイヤー。これらの岩壁をすべて登るには、僕の残りの人生では足りないだろう。キャラバンの後半には、美しい光景が展開することで有名なコンコルディアから黒いピラミッドK2が目

に飛び込んでくる。

K2は世界で一番難しい山といわれるだけのスケールと迫力を持っており、僕のモチベーションはますます高まり、早くK2に触れてみたかったし、早く頂上に立ってみたいかつた。

今回の計画は昨年の秋から始まった。僕とポーランド人ヴォイティク・クルティカは、ネパールはナムチェバザールのロッジで、対岸にある大きな滝を見ながら、来年の山について考えていた。技術的な挑戦としてはラトックまたはパイユピーク、高所登山ではナンガパルバートまたはK2東壁。これらのいずれかを一緒に挑戦することを相談した。

十一月には日本とポーランドの間で何度となく、電話とファックスをやり取りし、われわれは未踏のK2東壁に決定した。

ヴォイティクはすでに一九七八年にポーランド隊が北東稜に挑戦したとき、多くの東壁の写真を写していたし、可能なラインも発見していた。われわれのチームに山野井妙子、飛田和夫の南南東リブチームも加わり、K2エクスペディションはスタート

した。

しかし、実際にBCに入ったわれわれを待っていたのは、昨年に続く悪天候であった。東壁には、偵察を含め三回向かったが、壁のコンディションが悪すぎ、登ることはできなかった。ヴォイティクはK2をあきらめBCを去ることになった。東壁は将来の課題として残ってしまったが、いつか誰かが挑戦して登るだろう。美しく未知の部分が多いこの氷壁は、開拓するには素晴らしいルートだろう。

*

天候は雨または雪が降り続いたが、チャンスが訪れることを信じて、僕は単独で南南東リブに挑戦することに決めた。この単独行に特別緊張していたわけではない。過去に百本以上の単独登攀を実践していたし、高所についても理解していた。

七月二十八日、チョゴリザ側は晴れており、チャンスと感じた僕は、十二時三十分BCを出発した。

南南東リブは急な雪壁の中にところどころ4級の岩が出てきて、ルートにスパイスを与えてくれる。しかし七五〇メートルからの登攀は膝まで雪に潜り、体力を限界近くまで引き出さなければならなかった。

標高七九〇メートル

適当に作ったテント場は斜めで体

は安定しないし、マットレスはテントの隅で丸まっている。BCからここに到着するまで二十八時間ほどが経っている。

眠っているのか起きているのかわからない時間が過ぎ、北風が出発しるとばかりにバタバタとテントをたたき、三時間前に作った紅茶はすでに凍りつき、コンロで温めてもなかなか融けてくれない。それでも自分が何かしなければならぬという一人を楽しむ余裕があり、悪い気分ではない。食欲はなく、ビスケットを五枚だけ口に入れる。

ザックの中身をもう一度点検する。ヘッドライトの電池、グローブ、テルモス、チョコバー、十分すぎる量だ。外は満天の星空。いつもと同じように左からクランポンをつけ、今はまだ見えないボトルネックを目指して、ゆっくりと出発した。

標高八五〇メートル

寒さを感じない。何時間も前からピッケルとバイルを素手で握っている。ボトルネックも左へのトラバースでとても硬い氷に出くわした以外はほとんど問題がなかった。特別息苦しさも感じず、無酸素での登攀という意識もなく、時々落ちている酸素ボンベも不思議なもののように見える。常に自分の体に異常がないか気になるが、心臓と肺はちゃんと機

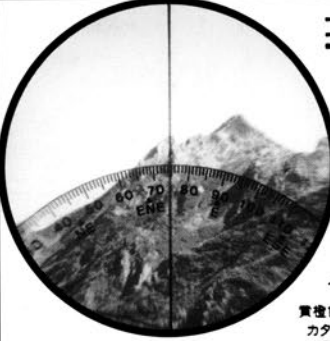
能している。下降時は危険そう美しい雪壁はダブルアックスで進んだ。最後の仕上げを急ぐつもりはなかったし、その力も残っていないようだった。

急雪壁を抜けると視界がよくなり、頂上稜線は頂に向かって左に伸び、紺色の空に消えている。最後は一気に三十歩進み、本当の頂に着いた瞬間、言い知れぬ疲労感が体を襲い、倒れこむように腰を下ろした。自分が表情を変えていないことがわかったが、心の中では微妙な震えを感じていた。展望は素晴らしく、僕にとって初めてのヒマラヤ登山になったブロードピーク、命をすり減らすような登攀だったガツシャブルムIV峰がともに見え、中国側は名前もなさそうな小さな山々がたくさん見えた。二十〜三十分は経過したのだろうか。早々に下山しなければならぬ。余り長く頂にいてはいけない。すでに多少バランス感覚が悪くなっている。K2で起きた多くの悲劇は下山中の出来事である。まだまだ死にたくないと思いがら下山した。

夕方、シオルダーのテントに到着した僕は疲れており、何もする気がなく、一面に雲が広がった空を見上げていた。それでもお茶を作り飲まなければ明日、下山ができなくなる。五〇〇ccのお茶を作り、無理やり飲

んだ。多分これで明日も歩けるだろう。

BCに戻って四日目、僕は考えていた。自分の登攀リストの中に、新たに八五〇メートル以上の山が加わったことは嬉しいが、筋肉のなくなった腕と脚を見ると悲しくなる。この体が高所での登攀の恐ろしさを物語っているのだろう。もっと水分を摂取し、ゆっくり登るべきだったのだろうか。ルートを目標の東壁から南南東リブに変えたことなど、いろいろ考えると、嬉しさも半減する。それでも難しい山といわれる、あの美しいK2の頂に立てたのだから、僕は満足しなければならないと思う。



コンパスグラス HB-3

広視野10°の明るい視野に目盛が重なって見えます。見た目標がそのまま正しい磁気方位です。

重量78g.
つや消し黒 ￥17,000 送料 ￥600
質感色メタリック ￥18,000 消費税別
カタログ代無料、電話、FAX、実書でどうぞ
〒177 東京都練馬区上石神井1丁目37番13号
TEL 03-3926-5411 FAX 03-3926-5411

株式会社 石神井計器製作所

幻の山・チョンムスターグ登頂記

早稲田大学山岳部OB 大谷映芳



ドームより見たチョンムスターグ峰 (6962m)

崑崙、コンロン、クンロン…、その名を口にする時、なんていい響きを持った言葉だろうと思う。初めて意識を持つて聞いたのは高校時代だったろうか、「通える夢はコンロンの…」と時々口ずさんだものだった。ヒマラヤの山々を越えて、さらにその遙か遠くにあるという、山を

始めたばかりの僕にとっては未知なる世界のロマンあふれる山だった。その崑崙山脈に未だ写真さえない「幻の山」があるという。もうすでに、目ぼしい世界の高峰が、ほとんど登られてしまっているこの時代にあつて……。

*

早稲田大学山岳部は今年、創部八十周年を迎える。三年前、その記念事業の一環としての登山を考えていた。まずは、ヒマラヤの高峰がいろいろと候補に上がったが、これといった決定的な魅力のある山が見つからない。隊員不足もあつて、なかなか対象とする山が決まらなかった。そのとき一人のOBが、以前出かけたことのある崑崙山脈の話を聞かせてくれた。まだまだ、それほど高くはないが魅力ある未踏峰が多くあるという。調べるうちに候補に上がったのが、チョンムスターグだった。僕自身、崑崙へはまだいったことがなく、「通える夢が…」実現できるとあつて、計画に参加した。

その辺りには、もう百年以上外国人が足を踏み入れておらず、写真もないという。過去に何隊かがアプローチしようとしたが、BCまで届かなかった。僕らは、まず記録にある同じルートへ偵察隊を出したが、唯一の輸送手段であるロバにとつては難しすぎて、BC手前までが精一杯だった。偵察隊の報告をもとに、あれこれBCまでたどり着く方法を模索したが、そのルートは不可能との結論だった。

そんなおり児玉茂OBが、一八九八年のインド測量局に所属するH・P・デーリーの記録を見つけ出した。

それは今までのように北からではなく、もつと東側からアプローチするものだった。昨年の九月に、二回目の偵察として児玉自身がデーリーのルートをたどり、BCに到達することができた。

普段荷役に使われているロバは強く、BCまでのルートは問題ない。かつて崑崙の山々の麓で放牧を行ってきた地元民には、土地勘があつた。問題は一つ、ロバの餌のことだった。高山砂漠では、餌となる草が極端に少なく場所も限られている。また、数の多いロバを、どのようにコントロールするのも問題だった。しかし、キャラバン・ルートはこの可能性の高いデーリー・ルートに決まり、時期は八月がよいということで、登山準備が本格的に進んだのだった。七月二十四日、西域南道のニヤの町から南へ一日走った最後の村、カラサイ村からキャラバンはスタートした。十二人の日本人隊員と現地スタッフ三人、ロバ使い十七人とロバ九十頭という、久しぶりの大キャラバン隊となった。当初心配された草は、今年は三十年ぶりの多雨ということもあつて、餌としては十分だった。山がこんなに緑色をしているのを初めて見たと、ロバ方たちも驚いていたくらいだ。

しかし反対に、雨が多いため川が

増水し、徒渉をあきらめたことが何回かあった。児玉の偵察時には、ほとんど流れのなかった川が、腰までくる流れの速い濁流と変わっていた。人は渡れても、荷を背負ったロバは流れやすい。水が引くのを待って、一日を無駄にしたこともあった。

長い時は五〇キロもロバに乗り続けて尻が痛くなったり、雨に悩まされたりと、快適なキャラバンではなかったが、道は前年に通っているのかわかりやすく、予定通り八月三日BC(四八五〇メートル)に着いた。手前の峠からは、初めてチョンムスターグ山群の真つ白に輝く雄大な姿に目を奪われた。晴れたのは、その日とキャラバン出発の日の二日だけだった。

早速翌日、前進BCまでのルート偵察に出た。予定していた尾根の取り付きまで、緩やかに続くモレーン台地を登る。ヤクやチルーなど野生動物の足跡が、黄色や紫の可憐な花々の間に見られる。ドームと呼んだ、雪をたつぷりとつけたピークから北に延びる尾根をルートと決めていた。上部では雪が降るのか、積雪は多そうだった。その尾根の途中にC1(五九〇〇メートル)、ドームの下にC2(六五〇〇メートル)を置き、頂上を目指した。

ドームへと延びる北稜は、大きな

雪の尾根で技術的な難しさはない。しかしその頃は、ほとんど毎日雪が降り、ルート工作とはラッセルをすることであった。尾根といっても雪の斜面を登っている感じで、雪崩れそうな新雪の登りは気持ちのよいものではなかった。翌日にはトレースは消えていて、かすかな踏み跡と旗を頼りに、再びラッセルの繰り返しだった。おまけに、シェルパもハイポーターもないので、すべてを自分らで運び上げなくてはならなかった。高度はそれほどないが、未知なる山でのルート選定、自分らだけの荷揚げと苦労が多かったが、手作りの山登りといった感じがしてよかった。

ところで今回の隊員構成は、OBが七名と学生が五人だったが、OBのうち二人は六十歳を超えていた。それは、おじいちゃんと孫と一緒に登っているようなもので、道具や登り方のギャップが大きかった。しかし、価値観や考え方は違っていない。山へ向かう気持ちは一緒に違いない。学生もOBも、世代差を乗り越えて言いたいことを言った。お互いのギャップの大きさを感じ、時には妥協すること(歩み寄り)の必要を学んだようだ。普段一緒に登っているわけではないけれど、相互理解は進んだようだった。

さんけんだより

来年こそ 山情報の提供者に

管理人 木村太郎・弥生

山研にお泊りいただいた方から上高地の情報、山の情報を教えていただくことが多々あります。「今、岳沢までの山道でシャクナゲがきれいよ」「徳本峠の残雪はこのくらいでしたよ」「涸沢の紅葉は来週が見頃かなあ」などなど。山研での留守番が仕事でもある私たちは、よほど意識して外に出ようとしなければ、日々山研内での仕事に追われ、上高地や、山の様子に疎くなってしまうがちです。

そんな中で、山行を終え山研に宿泊された会員の方からいろいろな情報をいただくと、うらやまします。

い気持ちと同時に嬉しい気持ちにもなります。満足げにニコニコとその時の様子を語る姿を見ていると、一緒に山を楽しんだような気にさえなります。

実際、私たちが山に行くことができるのは半年の間に一、二回程度、日帰りの山がほとんどです。「遙かなる穂高連峰!」「近くて遠い穂高の山々」なのです。

今年こそ、あの山この山へ登ってみようと思っていたのに、あっという間に山研閉所の時期となってしまうました。来年は情報をいただくばかりでなく、皆さんも知らないようなところのおきの山に登って、たまには誇らしげに情報提供できればいいな、と思っています。

山研は十月末から来春四月下旬まで閉所します。来年もまた山研でお会いしましょう。

まず進んだ。

八月十四日、大谷、木野、棚橋の三人が、第一次登頂隊としてC2に入った。僕らは今回、記録撮影の役割もあり、木野はカメラの担当だった。棚橋は学習院大山岳部のOBだが、普段はくの仕事である撮影を手伝ってくれている。一昨年は、ナン

ガバルバットの単独登頂を果たすなど、第一線級の登山家で、隊員としても活躍してくれた。三人はここ十年ほど、仕事としてではあったがともに山の中で過ごす機会が多く、気心も知れていた。高度順化は順調に進んでおり、チームワークは申し分なかったと思う。

十五日午前四時三十分、C2を後にし、頂上へ向かう。まずドームの登りから登攀が始まるが、相変わらずのラッセルに苦勞する。膝くらいまで積もった新雪が雪崩れるのではと、いつも不安であった。三〇〇メートルを一気に直上する。

ドームから先は、本峰と西峰とジャンクション・ピークを越え、頂上への稜線が続く。左側は北壁ですっぱり切れ落ちていて、大きく雪庇が張り出している。南側の斜面を行くようになるが、堅雪の上に新雪が乗っついて、ここでも雪崩の不安がいつもつきまとっていた。傾斜もかなりあり、滑落すれば一気にクレパスの待つ谷底へ飲み込まれてしまいそうだった。

その頃より、出発時には西の空にあった雲が山を包み込み、天気は悪化し始めた。雪交じりの風が吹き、視界は悪くなり、何度も天気待ちを強いられた。出直すことも考えたが、不安定な雪のルートをもう一度くる

のは嫌だった。頂上岩壁の下では、行くか戻るか最後の決断を迫られた。時間の余裕もなかったが、一瞬視界がよくなったときにルートを見定め、登攀を再開した。頂上直下の岩壁帯は巧く回りこむことができて、十五時三十分、頂上に立つことができた。雪も本格的に降り始め、登りのトレースが消えてしまった中を、必死の思いで下山する。結局、風雪の中でルートを失い、C2までもう少しのところまで、ビバークとなってしまう。標高が低いせいもあって、気温がそれほど下がらなかったことが、悪天の中での登頂を可能にし、無事に翌日C2に戻らせてくれた。その後、二次アタックと学生による西峰登頂を目指したが、悪天に阻まれ退却した。

*

早稲田の海外遠征として僕は、ラカボシ(七七八メートル)、K2(八六一メートル)に参加した。それぞれが困難な登山であった。しかしチョンムスターグでは、それらとは違った難しさを味わった。高度も、技術的にも体力的にもそれほどではないが、常に雪崩に怯えさせられた雪と、ころころと変わる不安定な天気は、山をいっそう難しくした。いつでもどこでも山登りには、難しさと危険、そして運やつきが伴うこ

とを、改めて感じさせられた。

さて、大学山岳部が、登山界をリードしていた時代もあったが、それは遙か遠い昔。本来ならば、八十年のまじめにふさわしい、もっと大きなニュースになるような遠征をするべきだったかもしれない。しかし、登山の世界も大きく変わり、登り方も多種多様で、とくに山岳部は部員減少で頭が痛い。時代とともに、人も、考え方も、価値観も変わるわけで、今回はそれなりに早稲田に合った山登りができたと思う。

僕自身も、結果としてはいいが、はなから記録を目指す登山は好きではないし、高くはなくとも崑崙の未

踏峰に登れたというだけで、大満足だ。もともと登山なんて、趣味で遊びでスポーツであり、最先端の命がけの登山をやろうと、百名山に登ろうと、その人の満足度に返ってくるものだ。それよりも、歳とともに登り方は変わっても、心から感動できる山登りを、死ぬことなく持続させることのほうが大切だと思う。

●新ハイキング選書●

藤井寿夫著

中央線の山を歩く

A5判・286頁・定価1680円(税込)

中央線の山を歩いて50年、中央線の山107座の紀行と案内。朝立ち、日帰りの範囲内、あまり登山者の歩かれていない山に重点を置いている。読物としても楽しい。最新刊 増刊出来

●深田クラブ編●

深田久弥の研究

読み、歩き、書いた

飯島齊 高澤光雄 高辻謙輔 深田クラブ編集部 共著

A5判・387頁・定価1680円(税込)

深田久弥の研究に造詣の深い三氏が、深田クラブ会報に、永年にわたり発表された成果をまとめたもの。深田久弥はこの一冊で全貌を顕す。

新ハイキング社

東京都北区滝野川 7-6-13
電話・FAX 03(3915)8110

報告

REPORT
11月

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

青年部

K2南南東リブ単独登頂 山野井泰史氏の講演会

九月二十日、本会大集会室において、青年部主催の山野井泰史氏講演会が実施された。日本登山界の第一人者である山野井氏は、本年八月、世界第二位の高峰K2（八六一メートル）の南南東リブ・ルートより、無酸素単独登頂に成功した。南南東リブは、奇しくも日本山岳会青年部隊が九六年に登頂（通算第三登）を果たしたルートであるが、山野井氏はBBCを発ってから約三十六時間後に登頂と、非常に速いスピードで登ったものである。

講演会は、K2登山の報告に加えて、過去のさまざまな海外登山のスライド報告や、「なかなかモチベーションが落ちない」という山野井氏

の登山観なども語られ、大変興味深いものであった。

参加者は五十名を数え満員の盛況で、特に青年部や学生部を中心とする若い参加者の多かったのが印象的であった。（松原尚之）

医療委員会

登山医学と高所生理の 国際会議チリで開催

二〇〇〇年十月一日から五日、南米チリのアリカにて登山医学と高所生理学に関する国際会議（International Congress on Mountain Medicine and High Altitude Physiology・会長クラウス・ペーン）が開催された。一九九八年松本で行われた会議に引き続きものである。

医療委員会からは、増山茂ほか、

中島道郎・滝和美・新井康弘が出席した。南米で行われるということもあって、地元チリはもちろん、ペルー、ボリビア、アルゼンチン、ベネズエラ、コロンビアなどから多数の参加をみた。欧州、米国からはUIAAやIKARの常連が参加していたが、スペイン語圏でもあるし、次回二〇〇二年のこの国際会議の主催国であるスペインから多数参加しているのが目立った。

南米では、五千メートル程度の高度に鉱山が多数ある。またチリやボリビアの高原には多くの天文台や気象観測センターが作られている。そこで働く人々の健康問題が大きく取り上げられていたのが開催地の土地柄を反映していた。

低酸素状態への適応、ある種の高度障害にかかりやすさ、などには遺伝子レベルの決定因子があるのではないかとの報告がここ数年始まっている。この会議でも新しい報告が注目されたが、高所居住民あるいは慢性高山病の患者に特徴的な遺伝子レベルの変化を見つけた研究者はいまだ現れなかった。平地居住民の高所での運動能力に関係しているのではと最近注目をあびているいくつかの遺伝子についても、詳細な研究をしてみると、結果は否定的であったという報告が多かった。この領域はま

だまだこれからである。

この国際会議では、ISMM（国際登山医学会）の総会も行われた。

二〇〇〇～二〇〇四までの新会長には米国のハケット氏が、アジアを代表する副会長には当会の中島道郎氏が選出された。残りの副会長は、リシャレ（仏・欧州）、ウエスト（米）、ファビオラ（ペルー・南米）。前会長のベルチェ（スイス）はgeneral secretaryに就任した。二〇〇二年の国際会議はスペインのバルセロナでと決定。二〇〇四年はラサ（または西寧）、ビシュケク、デリー、カトマンズなどの候補があげられたが決定に至らず。（増山 茂）

海外連絡委員会

ボリビア山岳会が建設中の チャカルタヤの小屋へ

十月六日、ボリビアのラパスを訪問し、ボリビア山岳会（Club Andino Boliviano）の会長であるプリエト氏（Carlos Aguilar Prieto）を訪問した。氏は、スキーや登山を含めた領域を管轄しているとのことで、長野オリンピックにも来ていた。

ボリビア山岳会は、当地の高所医学研究所と共同で、チャカルタヤ（五二〇〇メートル）に高酸素室に

することが可能なピラミッド型のラボラトリを建設中であり、意見を求められていたものである。

チャカルタヤの山小屋は四年前と比べると見違えるようにきれいになっていた。食堂にはテーブルクロスまであり、二階も整備中で宿泊可能にするという。この小屋はボリビア山岳会が所有しているものだそうだが、現在はオーストリア人にレンタルし経営を任せているという。

くだんのピラミッドは小屋の前の広場の一角にある。一辺が四メートルくらいのピラミッド。ボリビア山岳会とズビエータ博士との共同の事業であるとの銘がある。ほぼできあがっているのだが、酸素濃縮器の設置はまだのようだ。完成するのは来年以降になるという。馴化のペースとしては確かに快適そうである。

実はこの時期、ボリビアはとても緊張状態にあった。政府とコカ栽培農家との交渉が決裂し、彼らは妨害活動に入る。労働組合や教員組合も同調してストライキを打つ。爆弾騒ぎが頻発する。ラパスに入る幹線道路は石などでブロックされ食料品の搬入がストップ、生鮮食料品の値段は三倍になる。もちろん陸路での国際国内交通も遮断され、観光客もほとんど入れない状況となっている。前夜の段階で収拾の動きがあり、こ

れならばとチャカルタヤに向かったのだが、途中の道路には封鎖のあとが何カ所もみられたし、放火されたあとも散見された。

しかし、十月六日にお会いしたラパス市長のグラナド(Juan Del Granado)さんはボリビア、ラパスは基本的には安全な場所です、と強調する。日本のお客さんには不安な思いはさせません、大歓迎します、と上機嫌であった。

カルロス・A・プリエト氏からは、ボリビア山岳会の旗をいただいた他、イリマニ、ワイナボタシ、サハマなどの登山に関する資料を頂戴した。日本の山岳関係者、とくに日本山岳会の方がいらつしやれば大歓迎をします、とのことであった。ボリビアでの登山を考えている会員はご一報ください。紹介いたします。

(増山 茂)

指導委員会・集委員会

第一回スポーツ

クライミング講習会

十月十五日(日)、多摩スポーツ会館(東京都昭島市)内の室内クライミング施設を用い、指導、集委員会主催の第一回スポーツクライミング講習会を実施した。近年ますます盛

んになるスポーツクライミングの魅力と基礎技術を未経験者、初心者に伝えることを目的とした試みである。講師は松原尚之、中山健次、高橋繁樹の三名が務めた。

参加者は二十歳から七十六歳までと幅広い年齢層におよび、二十一名を数えた。そしてトッププロップ、リード、ボルダリングなど、さまざまなスポーツクライミングの登り方を練習し、楽しんだ。

性別や年齢に関係なく誰でも楽しめることから、今回も多数の参加希望者があつた。初心者・初級者を対象とするクライミングの講習会はこれまで行われてこなかったもので、今後指導委員会では、年に数度の定期的開催を考えている。(松原尚之)

アルバータ二〇〇〇実行委員会

登山とトレッキング

カナダの夏の総仕上げ

九月二十六日夕、新宿中村屋において、アルバータプロジェクト二〇〇〇、八月の登山とトレッキングの打ち上げパーティーが開かれた。

大塚会長、大森実行委員長のほか、熊崎登山隊長以下隊員、山田元会長を筆頭とするトレッキング参加者、実行委員会メンバーなど約五十人の

参加者で会場は盛り上がった。紙上で報道してくれたサンケイ新聞の錢本記者、舞台裏で様々な協力をしていただいたカナダ観光局のデレク・フッド東京代表にもご参加いただいた。

大森実行委員長の総括報告の後、このプロジェクトの三つの柱であった、登山・トレッキング・ジャスパールでの祝賀会の報告がそれぞれ熊崎・田辺・増山からなされた。参加者は八月のカナダをなつかしみ、写真の交換や来年の計画の相談など時間を忘れて懇談した。

なお、正式の報告会は年次晩餐会にて行われる。

(増山 茂)

日帰りからキリマンジャロ、マッターホルンまで 全国ネットの山旅専門店! 安全で快適な山旅を、中高年から一人様までサポートします。各コース経験豊富なツアーリーダー同行で安心。 おすすめオリジナルプラン手配OK 人気の山旅スタイル。気軽に問合せてください。		2000年秋からの やませみクラススタート 大好評! 初心者向けの山歩き講座。各地発着のプランをご用意しました。 2001年度カタログも ご予約ください。
アミューストラベル株式会社 〒160-0023 東京都新宿区西新宿 1-22-2 新宿サンエビル B1 ☎03(5325)1256 FAX03(5325)1258 大阪06(6456)3366 名古屋052(588)5617 福岡092(414)5566 広島082(502)2525		

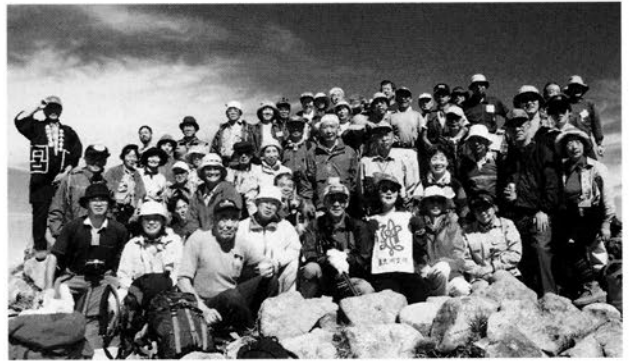
第十七回全国支部懇談会

二〇〇〇年九重集会
百五十人が参加して開催

九月十六日(土)、十七日(日)の二日間、東九州支部主管で第十七回目の全国支部懇談会が開かれました。十六日は台風情報の中、会場の別府市田の湯「つるみ荘」には前日からの宿泊者十五名を含めて百五十名もの会員が集いました。

十二時半、梅本秀徳支部長の「支部設立四十周年に十七回目の全国集会を開催できたことは、いつまでも支部員の心に残るでしょう。台風の進路も定まらない中、全国各地から大勢お集まりいただきありがとうございます。『さいます』」の挨拶で開会しました。大塚博美会長は、カナダ・アルバータ登山とトレッキング、祝賀集会の報告の後「あと五年で百周年です。歴史ある日本山岳会の記念事業を皆で力をあわせて成功させましょう」と述べました。

斎藤惇生前会長の記念講演のテーマは「ヒマラヤの西と東」。今西錦司元会長のパイオニアワークの影響を受けて登山を実践してきた過程を語りました。ヒマラヤ、カラコルム、チベットの山々をスライドを映しながらエピソードを交えて一時間半。



台風一過の青空の下、久住山頂で

画面の景色に隊員になったような気分になり、聞き耳を立てたひとときでした。

小憩後は支部の活動報告です。各支部とも二、三分の短い時間ですが、熱のこもった発表でした。次に九月二日に誕生した日本山岳会第二十五番目の北九州支部の紹介があり、明日の山行説明の後、くじ引き着席して懇親会の始まりです。

高木崎男岐阜支部長の音頭で乾杯、各地からいただいた銘酒に懇親の輪が広がりました。東九州支部の加藤英彦会員の司会に、北海道支部の方々が地方色豊かな歌を披露し、首

都圏の女性会員のカンツォーネに拍手喝采。笑いの渦の中、次回開催予定の津田文夫石川支部長が閉会の挨拶を述べました。その後は各部屋で盛大に二次会が開かれたのは言うまでもありません。

十七日五時、バス三台、自家用車十台で一路九重牧野戸へ出発です。九州横断道路からは豊後富士のシルエットを眺めて、六時半、牧野戸に到着。A、B二班に分かれて九州本土最高峰の中岳へ向かいました。台風一過の青空は、晴れ男、晴れ女がそろったせいでしょうか。昨夜の疲れも見せず笑顔の山歩きは久住山で合流。昼食後、赤川から大分駅へ出て、別れの言葉は「また会いましょう」でした。

二日間、延べ三百人のミレニアム九重集会に参加して、皆さまのエネルギーをいただきました。東九州支部四十一歳へ向かって、支部員一同、頑張らなければと心しました。

(西 孝子)

山の自然学研究会

山の自然学講座
上高地インタープリター

この夏の上高地で、七月三十一日から八月三十一日までの二十二日間、

常時四名ほどが詰めてインタープリターの作業を行いました。まずまずの成果をあげられたと思っています。難しさもわからないで始めてから今年で七回目になります。未だ十分とはいえませんが、だいぶ「伝える心」を身につけ、やる人も増えまします。

昼の拠点はビジターセンターです。ここで人を集めてもらい、九時十五分と十時から、二・四隊、延べ六十五隊が明神方面などに出かけます。自然観察の解説をまじえた自然の案内ですが、これを通して一番勉強しているのは、実は私たち自身です。

昼はビジターセンターで、夜は上高地温泉ホテル、村営ホテル、西糸屋でのミニトーク(一時間ほどのスライドなどを交えた講演)、その回数は六十五回になりました。二十二名がそれぞれ交代で個性のある話をします。まずまず好評でした。

すべての活動で接したお客さまの総数は約千人。上高地を訪れる百数十万人の中のほんのわずかですが、アンケートを見ると、それぞれ何かの感激と自然理解を持ち帰ってくれています。それを読んで私たちの作業が報われたように感じました。この気持ちをバネに、全員、この地道な努力を続けようと思っています。

(大森弘一郎)

山岳博物館散歩……7

伯耆国山岳美術館



朝9時30分、そこには今日も伯耆大山(1711m)が裾野を広げてそびえている。その姿はまさに伯耆富士である。伯耆国美術館は、平成5年12月、「山岳文化創造の館」「地域文化の振興」を基本理念として、多くの岳友の支援により開館した私設の山の小さな美術館である。

メインホールには日本山岳会よりお預かりしている「足立源一郎・槍ヶ岳の朝」など五点の他、山里寿男の「伯耆大山・縦走路」、吉岡淳一

(本会山陰支部)の伯耆大山崩落の象徴「槍ヶ峰・道標」、鳥取県洋画壇の重鎮八橋誠滋「季節風」などはぜひご覧いただきたい作品である。

2階ミニホールでは平均1ヵ月くらいのサイクルで写真展や趣味展などを開催し、無料でご覧いただいている。

4月より始めた「館長手打ち蕎麦」は、地元産のそば粉を使用し、大好評。機会がありましたらぜひご賞味ください。(館長・吉川明秀)

伯耆国山岳美術館

住所：〒689-4213

鳥取県日野郡溝口町金屋谷943

Tel：0859-63-0396

Fax：0859-62-1710

休館日：月曜(祝日の場合は翌日)

交通：JR米子駅よりタクシーで30分。JR伯耆溝口駅からタクシーで5分、徒歩60分。

中国道落合JCTから40分、米子道溝口ICで下車、伯耆大山に向かい2分。

入館料：大人500円

紅葉の志賀高原で 秋季撮影会

十月七日(土)・九日(月)の日程で、秋季撮影会が志賀高原で実施された。

羽田代表以下参加者十六名、うち現地合流の石浦さんは富山県黒部市からの参加である。北アルプス連峰が夕陽に染まる頃全員がヒュッテに着いた。

当クラブ会員で東京歯科大学山岳部OB佐々木先生のご好意で、杖痕

クラブ・発哺ヒュッテに二泊することができた。スキークオースのすぐ脇に建てられたヒュッテのロビーからは、暮れなずむ山々の稜線がひととき美しい。ヒュッテのすぐ近くに天狗の湯がある。さっそくひと風呂浴びて夕食となる。

今回の撮影会委員長、山本会員の

音頭で乾杯。常連、初参加とも自己紹介を兼ねながらのなごやかな会食となった。食後はロビーで山岳写真のスライド(羽田、川嶋、北村各氏の作品)を鑑賞した。

八日、朝七時、松茸ご飯のかぐわしい香りと信州の空気をたつぷり吸い込んで、管理人夫妻の心のこもった食卓を囲んだ。八時出発。信州の秘境、秋山郷、そして志賀山と池めぐりの二コースに分かれ、それぞれの車に分乗し、撮影地に向かった。

秋山郷へは、右に左に紅黄林を眺めながら奥志賀林道を一時間半、管理人夫人の案内である。苗場山と鳥甲山に挟まれた秋山郷は、源頼朝に敗れた平家の残党が逃げ込んだという伝説の地。豪雪のため交通機関がすべて遮断され、陸の孤島となることもあったという。現在でも厳冬時、晴れる日の少ない厳しい環境にある。保存民家や民俗資料館、柱状に延びた絶壁岩、先人たちの命の叫びがレンズの向こうから聞こえてくるよう

だった。

昼食はノヨサ里、牧之の宿で手打ち蕎麦をほおぼる。栃餅大福、焼き団子もおいしかった。

池めぐりコースは渋池、四十八池をめぐり、志賀山山頂からは大沼も一眺、水と紅葉のコントラストを満喫できた。

夕食の後はロビーでカメラ、フィルムなど各種専門的情報の交換。古き懐かしい時代の話にも花が咲き、夜が更けた。

九日は小雨、朝食を済ませて解散。天気も何とかもって撮影会は終了し、秋深まる信濃路を後にした。

(高橋 宏)

地の果ての大自然パタゴニア 15日間

発着地 東京発着・大阪発東京着

●11/23●11/11●2/1

●2/22●3/7 発

¥728,000

●12/21発 ¥780,000

●12/28発 ¥798,000

【ツアーのポイント】———
チリ側のパイン山群とアルゼンチン側のフィッツロイ山群の両方を訪れます。2大山群のハイキングに加えて、雄大なモレノ氷河も訪れる、パタゴニアの旅の決定版。テント泊なし、すべて宿舎泊。



運航大臣登録一般旅行業490号/日本旅行業協会正会員
アルパイツァーサービス株式会社

〒105-0003 港区西新橋1-12-1 (西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911
大阪 ☎06(6444) 3033 名古屋 ☎052(581) 3211 福岡 ☎092(715) 1557

海外の山

石川直樹と仲間たちの地球縦断

江本嘉伸



これが石川直樹。
98年6月、マッキンリー山頂で。

マチュピチュ(ケチュア語で、老いた峰の意)は、標高二四三〇メートル、ペルー南部ウルバンバ川の峡谷に位置する十六世紀インカ文明後期の代表的な都市遺跡だ。いまでは貴重な観光資源となっているこの史跡へ行きつく健脚者向きルートとして、「インカ・トレイル」がある。もともとエクアドルのキトからチリのサンチャゴまで広大なインカ帝国の南北をつないだ幹線道路。そのうちクスコと聖山サルカントイ(六二七一メートル)を擁するビルカパンバ山群をつないだ山道の一部がマチュピチュへのトレッキングコースとなっている。

日本山岳会のおそらく最年少会員のひとりである早大生、石川直樹は十月二十日から七人の仲間たちと普通は三泊四日かかるこのトレイルを二泊三日で歩きぬいた。

ポーターに荷を背負わせたハイカーたちとも出会ったが、石川が古都までたどり着いたことの、感慨は深かった。はるばる北極から七ヵ月かけてやって来たからだ。

三月号のこのコラムでふれたが、石川は、カナダ、アメリカ、韓国、ブラジル、など各国の十八歳から二十六歳までの七人とともに、北極から南極をめざす旅を続けている。カナダの冒険ツアー・ガイド、マーチン・ウィリアムズが企画した「Pole to Pole 2000」のメンバーなのだ。四月はじめ北磁極から歩き出し、氷と戦いながら北極冒険旅行の基地、レゾリュートへ。ここからいったん飛行機で北米大陸に運ばれた後、かわるがわるペダルを踏む自転車リレー方式でアメリカを縦断、中南米にはいる際はヨットを交代でワッチしながら、というふうにより「自力」南下してきた。

ハイカーも行くといっても、三八〇メートルと四二〇〇メートルのふたつの大きな峠を食料、テント、寝袋などが入った重いザックを背負って越えながらの旅だ。元気な八人の若者にも次第に高度の影響が出始め、二人はついにマチュピチュの手前で引き返した。降り出した雨が電

（石のつぶてを投げられているような激しい雹の歓迎を受ける。インカの民がこの遺跡に屋根を作らなかつたことをうらめしく思いながら、濡れそぼる体をかがめてクラッカーをかじる。土の地面に跳ね返った雹は、泥水と共にツナ缶やクラッカーの袋に飛び込んでくる。ぼくらはガリガリした土と一緒に湿ったクラッカーを食べ、天候の回復を祈った。激しい雹雨はやむことを知らず、ぼくらは休んだ気がしないまま、再び登りにかかった。雨のハイクは心地いいものではない。皆無言で黙々と歩を進めた……）

途中の行程について、二十三歳の石川は、驚くほど詳細に日記を書き、自分のウェブサイトに送り続けている。本人の了解を得て一部を引用させてもらう。

十月二十二日、あこがれの空中都市を眼前にした時の感激。

（僕はマチュピチュが目の前にあると思うといつもたつてもいられず、先を急いだ。ある地に憧憬を抱くと、その地名というのも重要な要素の一つだ。マチュピチュという言葉の響きには不思議と惹かれるものがある。段段畑の頂上にある墓跡に着いた。ここからのマチュピチュ全景は素晴らしく、よく本などで見かける写真はここから撮ったものと思われる。リヤマがのんびりとした仕草で草を食み、平地の無いマチュピチュでは山の斜面に広大な段段畑が作られている。石でできた都市は無

骨ながらも落ち着いた佇まいを見せ、静謐な時間の流れを感じさせる。）

ここに至るまでさまざまな形の冒険、トラブルもあったが、中でも北極での日々は大きな体験となった。

五月八日、極地を抜けた時の通信。

（とにかく全員無事。顔に凍傷を負った仲間が何人かいますが、軽いものでたいしたことはありません。北磁極を四月五日に出发してからちょうど三十日。約六〇キロのそりを各自が引つ張り、スキーでひどい乱氷の中を出発。一日に五、六キロしか進めないこともありました。

途中、七匹もの白熊に出会いました。これはかなり多いほうだと思います。夜中、キャンプサイトの目の前一五メートルほどのところに現れたときは、「やられるか」と思いました……）

個人的な仲間ひとりひとりについての観察も率直で、毎日ひきつけられる報告が書きこまれる。日本にいる仲間が支えているが、どんなに通信不便な場所でも、送信に最大限の努力をする石川は、すでに書き手のプロの雰囲気さえ漂わせている。

極地、海、山、ジャングルと青年たちの、しんどいが深い体験の旅。十月二十九日、石川たちはついにアタカマ高地に入った。一ヵ月後にはゴールの南極入りする予定だ。帰国したらは非、山岳会で話をしてみたいが、とりあえず彼と仲間たちの旅については

<http://www.p2pnaoki.com> へ。

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき一〇〇〇字程度でお願いします)



イラスト・宇都木慎一

アルプス夏便り

大森久雄

この八月、四年ぶりにツエルマツトを訪れた。毎日晴天で暑く、街の前にもましてはなやかで、にぎやか。あの表通りは、まっすぐ歩くのがむずかしいほどの人の波で、山姿で歩くのが気がひけるような、あたりまえの観光の町化していた。

ガイド組合の建物も一新され、全面ガラスばりのモダンなものに変わっていきなりビックリ。受付には日本の若い人が何人も順番待ちで、山の申し込みをしていたが、わたしの着いた日は、七月と前日までの悪天候でマッターホルンは真っ白。ガイド組合も当分マッターホルンは受け付けないという。以前はたしかマッターホルンだけだったはずの登頂認定証

が、ブライトホルン、モンテローザ、カストール、ポルククスまでもひろがっていて、マッターホルンは一〇フランだったと記憶しているが、あとは一律五フラン。ガイド組合の商売熱心に感心した。ちなみにこの夏のマッターホルンのガイド料金はノーマルルートで七三〇フラン(以下いずれも数字はスイスフラン)。別に登録料四〇、ヘルンリ小屋二食付き宿泊料一四四(ガイドと二人分)、ロープウェイ代往復二三・五で、計九三七・五フラン。ほかの山は、ガイド組合の募集するグループ山行の場合で、ブライトホルン一二五、ブライトホルン西半縦走二六〇、カストール二五〇、リップフィッシュホルン三九五、モンテローザ四四〇。ツエルマツトの前に行ったコルチナ・ダンベツツォは、滞在五日のうち晴れが一日、あとは曇天と雨。そ

の晴れの日にはチマ・グランデ・デ・イ・ラヴァレド(ドライ・チンネン)の基部を一周してみた。あの大北壁には主峰にも西峰にも、前衛峰南壁にも何パーティーも取りついていた、意気盛んなところを見ることができたが、当方は雨で成果なし。シャモニに移動。こちらでは遭難の話が多く、八月前半までで、この夏モン・ブラン山群では四十人を越す遭難者が出ているとのこと。六年前、グラン・モンテのロープウェイ山頂駅からひとりで氷河に出て行つたまま消息を絶つた日本女性が最近、クレバスから見つかったという。わたしがアルジャンティエル小屋に入つた時もその氷河でガイドが、待てとわたしたちに何回か制止したことがあった。氷河はひとりで綱なしで歩かないことは鉄則なのだが。またその数日前には、アルジャンティエル針峰中央氷河上部でふたり、滑落死亡したらしいとか、毎日天気は上々なのに話は暗いものが多い。もつとも数年前の夏にも、救助隊のヘリコプター・パイロットが疲労しているという記事があったし、遭難多発は毎年のことらしい。九八年の数字だが、六月から九月までにおこなわれた救助活動は二百九十六件、死亡十七名。その大半が疲労や高所障害などトレッキング不足で、悪天候によるものはごく少ない。

北アルプス白馬連峰

白馬五竜スキー場直下

スキーツアー、雪上訓練、クロスカントリースノーシューによるスノートレッキングにご利用ください。

11月より滑走可能
リフト割引券あり

和牛料理の宿

⊕ ひまわり

長野県北安曇郡白馬村神城22114-17
TEL (0261) 75-2292(代)
FAX (0261) 75-3284

で、悪天候によるものはごく少ない。国籍別では、地元だけにフランス人が四〇(以下数字はいずれもパーティー)、スペイン人一〇、イタリア人九、東ヨーロッパ各国が一八などで、日本人が数字に出てこないのは幸いだ、ヘリコプターがなかったらどうなっていることかとその記事は結ばれていた。フランス・アルプスのひとつヴァノワーズ山群ものぞいてきたが、エギュー・ラ・ヴァノワーズの北壁(高さ数百メートル、幅二キロ)にも十数パーティーが取りついているのが見られ、岩登りが盛んなことが実感できた。

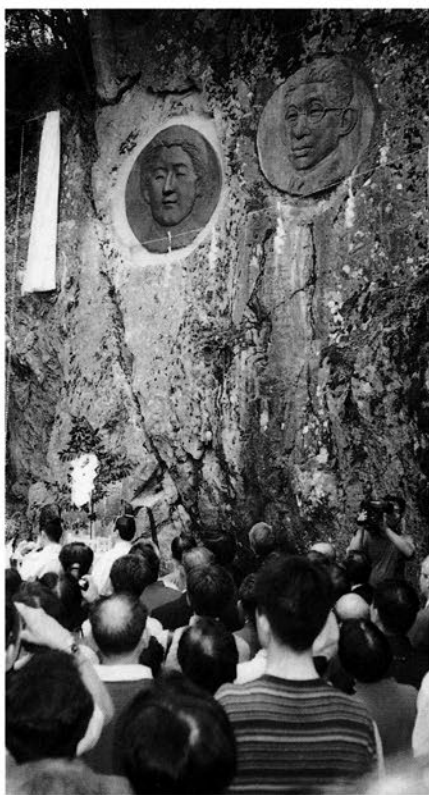
来年夏にアルプスをめざす方の参考になればと思うが、そういう希望の方は「山」六五七号、近藤等氏の「モン・ブラン情報に補足」を改めて読んでおかれることをおすすめしたい。

なお、アンナプルナ登頂五十周年で切手が発行されている。

秩父宮妃殿下のレリーフが 秩父「霧藻ヶ峰」に完成

森 武昭

秩父三峯神社から雲取山へ向かって約一時間半のところに、霧藻小屋がある。そのすぐ手前の岩壁に、秩父宮殿下のレリーフが設置されている。殿下が生前この地を訪ねられて自ら「霧藻ヶ峰」と命名されたとの



秩父宮殿下の隣に設置された妃殿下のレリーフ

話である。

この隣に、平成七年に薨去された秩父宮妃殿下勢津子さまのレリーフ（法元六郎氏制作）が完成し、八月二十二日に除幕式が催された。このレリーフは、地元の市町村や山岳会が中心になって建設委員会を設置し、本会の大家会長も顧問を引き受けている。

当日は、妃殿下の甥にあたる松平恒忠氏、元宮務官の山口峯生氏（本会会員）、土屋義彦埼玉県知事（建設委員会名誉会長）らが出席し、午前十時から、三峯神社宮司の祭司により除幕式が催された。そして午後零時半から、場所を三峯神社報徳殿に移して、千人近い参加者のもとに盛大な記念祝賀会が開かれ、レリーフの完成を祝った。

両殿下と本会との関係は皆さま既

にご存知のとおりであり、会員諸氏におかれましては、三峯、雲取山方面に出かけられた際にはぜひ立ち寄って、両殿下のご尊影を拝していただきたいと思う。

スゴ乗越の幕営者から マナーを学ぶ

五十嶋一晃

今年の夏は北アルプスのスゴ乗越小屋で二カ月間を過ごした。その間、幕営者から多くを学んだので、その一例を紹介したい。

私の今年の課題としてテント場の整地を取り上げ、幕営者にも意見を聞きながら、二十五〜三十張りくらい張れるように整地した。

整地の前に、まずテントを張る様子を観察する。幕営者は先着順にいい場所を選定してテントを張る。テントの大きさにもよるが張る場所には一定の傾向が見られる。やはり心地よい場所から順に張られていく。それを参考に整地の拡大を行ったのであるが、その過程で数多くの幕営者と意見の交換をすることができた。最近の幕営者のマナーは、一部例外もあるがきわめてよい。長い山行でゴミ屑がたまり、それを家に持ち帰るパーティーが多い。スゴ乗越小

屋では薬師岳方面に向かつて、五色ヶ原方面へ縦走するにしても、かなりアルパイトを要するので、幕営者のゴミは小屋のゴミ籠に捨ててもよいこととした。大方のパーティーは喜んで置いていく。

八月二十一日に東京農業大学山の会のパーティー十三名が三張りのテントを張った。そのゴミ袋が十分かさ張っていたので、私は「本来ならば自宅に持ち帰るのがルールですが、ここではどちらに縦走しても大変なので、ゴミは小屋で処理しますから置いていってもいいですよ」と話すと、「それは大変ありがたい」といって感謝された。ところが「ゴミはどのように処理しているんですか」と聞かれたので「焼却処理をしていますよ」と答えると、即座に「それでは持つて帰ります」といってゴミ袋をしまい込んでしまった。

その人はリーダー格風の女性であったが、一時的な利便性や荷物の軽さよりも、次世代を視野に入れた環境保全の姿勢には、私自身が教えられ感動さえ覚えた。

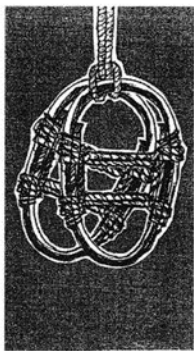
以来、山小屋の焼却炉には大いに関心を持つようになった。太郎平小屋では、今年全国の山小屋に先駆けダイオキシンの発生を抑える高熱処理の焼却炉を導入したが、宿泊者が年間千人あまりのスゴ乗越小屋の規

俳句

富士、吉田浅間神社の火祭

小林碧郎

大富士を畏れ鎮むる火の祭り
 富士閉づる今宵火に酔ふ吉田宿
 夜を込めて富士に捧げむ火を焚けり
 火祭の大松明の崩れそめ
 火祭の火屑踏み来て神酒を享く
 富士込めし夜霧に猛る祭の火
 火祭や室仕舞ふ火も天に在り



イラスト・宇都木慎一

韓国・五台山、小仏、北漢山山行

吉武玲子

馬鈴薯の花咲く五台山登山口
 大山蓮花咲きある入山料金所
 えこの花散り敷く尾根に栗鼠遊ぶ
 小仏
 えこに降る雨に濡れりて瀧仰ぐ

北漢山 白雲山荘

山小屋の寸土にそだつ夏大根
 山城の城門低き紅うつぎ

模ではそこまでに至っていない。ゴミの一部はヘリコプターで麓に下ろしているが、何とか改善策を提案したいと模索している昨今である。

第一回ライチョウ会議に三人が出席

関清

ライチョウはユーラシア大陸と北アメリカ大陸の北部に棲息しているが、ニホンライチョウは北半球の一番南の緯度に位置し、日本特産亜種の特別天然記念物で、世界的にも貴重な存在である。

日本ではライチョウは氷河時代の遺存動物として、海拔二四〇〇メートル以上の高山帯、北アルプスと南アルプスの峰々と乗鞍岳、御岳に全部で約三千羽棲息しているといわれている。過去には木曾山脈の駒ヶ岳、八ヶ岳、蓼科山、白山にも棲んでいた記録があるが、絶滅した。これは地球の温暖化と、高山帯に集中する人間による環境汚染がライチョウの生態系を脅かし、種の存続を脅かすに至った結果だと思われる。

平成三年には環境庁はニホンライチョウを絶滅危惧種に、平成十年には環境庁は見直した新レッドリストでニホンライチョウを絶滅危惧Ⅱ

類(絶滅の危険が増大している種)に分類している。

ライチョウに関する調査、研究や保護運動は以前から各所で個々に行われている。日本山岳会においては、山の自然学研究会で平成八年(一九九六)に地球環境基金の補助を得て、ライチョウ保護を呼びかけた絵葉書をつくり、各所に配布してきた。今まで、立山黒部アルペンルートの扇沢駅、室堂自然保護センター、北アルプスの山小屋、市立大町山岳博物館などに延べ十三万枚に及ぶ配布、説明を行ってきた。また、富山雷鳥研究会が毎年、室堂で実施している雷鳥調査にも微力ながら参加協力している。

この実績が認められてか、このたび開催されたライチョウ会議にわれわれにも声がかかり、三名(大森弘一郎、埴崎滋、関清)が出席した。

第一回ライチョウ会議は八月三十一日、大町市のフレンドプラザ大町において開催された。会議は環境庁・林野庁・文化庁、長野・富山・静岡・岐阜各県市町村の行政機関、研究機関・団体、山小屋及び山岳関係者など約八十名の参加があった。会議は「日本アルプスとその周辺の山岳に生息するライチョウの解明を通し、生息環境を含めた保護と、人との共存の道を探ることに寄与する

こと」を目的として発足。会長には信州大学教育学部の中村浩志教授が選出された。また会議の運営のために検討委員六名(研究機関・行政・民間からそれぞれ二名)が選出された。その中に民間人の一人として、日本山岳会から大森弘一郎が選ばれたのは意味のあることと考える。

大町山岳博物館顧問の平林国男による「ニホンライチョウと人」の基調講演で午前の部は終わり、昼からは、前半はライチョウ研究の現状について、後半は行政機関の野生動物保護の現状と考え方についての事例発表がスライドやOHPでなされた。最後に第一回ライチョウ会議アピールが採択されて、盛会のうちに閉会となった。

当然「保護のための研究」であつて、「研究の口実として保護」ではないのだが、ともすると危機感が薄れがちになるのに対して、大森が「保護が成功しなければ研究も無価値だ」と発言し、一部の共感を得た。

ライチョウ会議は今後、年一回の開催予定である。会議を通してわれわれはさらに広く、ライチョウ保護活動を進めていこうと考えている。

日本山岳会もこの活動に積極的にかかわるべきだと考えている。この活動に興味のある方は山の自然学研究会へぜひご連絡ください。

図書紹介



イラスト 蜂谷益雄

小浜浩三・著

『妻と二人の山歩き(実践篇)』

同名のシリーズ三作目となる本書は、著者が選んだ「良い山」のガイドを兼ねた紀行文である。

選ばれた山々は北海道・東北から西日本まで十一のブロックに分けて六十五座と、高原・湿原・山上湖など六カ所にのぼり、行動時間十一時間以上のハードな山から手軽に登れる低山までバラエティがある。

最近の良い山の登山事情にも触れ、大手旅行会社による団体登山など、日本人のレジャー、世紀末の日本人について考えさせる本でもあった。また、なぜか半世紀も前に読みふ

けた深田久弥の山の紀行のあれこれがい思い出されて、改めて「光岳」など、心に刻まれた紀行を読み返して、昭和・一桁時代の山に想いを深めさせられた。それは著者が、ヒマラヤに熱中していた一九六〇年代に九山山房に入り浸っていた、深田さんの警咳に接していたことも関係があるのだろうか……。

最後に、それぞれの山のコースタイムが記されていて、十分な休憩時間をとって登ることが中高年登山者には大切なことを、さりげなく教えてくれる。

(関塚貞亨)

二〇〇〇年十月 光人社発行 二二二ページ 千七百円

東京大学山の会・編

『輝けるときの記憶 山と友Ⅱ』

東大スキー山岳部(TUSAC)は一九二三年に生まれた。本書はその七十五周年を記念して、東大山の会(OBの会)が編んだものである。山の会ですでに、同会五十周年記念に『山と友』(一九八一)を出している。

今回の本では、TUSACの草創期のことにも触れているが、当然、一九七〇年代半ば以降の現役と若いOBの活動に重点がある。これは部が多く、部員を擁して最も盛んだっ

た時代だ。『輝けるときの記憶』という気負った書名にそれが表れている。

戦前のTUSACは限られた数の旧制高校山岳部からきた連中の集まりで、クラブという雰囲気が強かった。そこはパーティーを組む相手を見つかる場で、訓練とか統制とかとは縁が遠かった。しかし戦後、各地の新制高校卒業生が入ってくるようになると、部の性格は変わらざるを得ない。『輝ける』の時代には、現役の山行は年四回の合宿(訓練主体)プラス個人山行(個人の発意によるが部の審査・承認が必要)というシステムができて上がっている。このことには滝谷遭難(一九五九)の後で

きたTUSAC憲章の影響もあった。この時期はちょうど登山界全体で新しい装備の開発や人工登攀その他の登山技術の進歩が目覚しかったときで、TUSACの合宿でも高度な技術の追求に力を注いだ。インドヒマラヤの難峰シヴリンの北稜初登(一九八〇、これは『山と友』記載)や岩壁・氷壁に護られて各国隊を拒んでいたカラコルムのK7初登頂などはその成果である。ヨセミテでいわゆるアメリカン・エイドによる岩壁登攀を経験してきた若手の活動もこれに貢献している。

しかし、この時期のTUSACは極限的な登攀だけに熱を上げていた

わけではない。『輝ける』にはひとり無人の山野に分け入ろうとする試みがいづつか載っている。谷川岳赤谷川廻行のドウドウセンの探検、利根川本流の単独廻行(雪溪の下をくぐって泳ぐ!)などなど。

TUSACの若いOBが他のグループのメンバーと組んだ活動を拾ってみると、アコンカグア南壁の二人だけのアルパイン・スタイルの登攀、三人パーティーでのチョーオユーの無酸素登頂(これを書いた山本正嘉は運動生理学専攻で、この記事は高所を志す人に有用)。

これは「TUSAC」の仕事ではないが、ナンダ・デヴィ(一九七六)とカンチェンジュンガの縦走(一九八四)の二つの登山の隊長だった鹿野克彦が書いていることは、正直で面白い。

個人の名前を出さずに書くことしてきたが、最後にきてこの禁を破った。沼田恵照のグループのことにも触れたいが、紙数が尽きた。

(木下是雄)

二〇〇〇年六月 東京大学山の会発行 四四八ページ *ご希望の方は練馬区練馬四・二四・九 Fax 〇三・五九九九・七七八四 東大山の会事務局までご連絡ください。JACC会員には実費五千円の一割引、郵送料五百円で頒布します。

会務報告

九月理事会

日時 九月十三日 十八時三十分～
二十一時三十分

場所 日本山岳協会議室

出席者 大塚会長、小倉、大森、竹内各副会長、西村、村井(龍)、森、宮崎、高原、勝山、村井(葵)、宮下、鰐坂、高遠、増山、坂井、河西、坂本各理事、中村、神崎各監事、中川、田邊各常任評議員

〔委任〕松原理事、平山、平野、吉永各常任評議員

〔審議事項〕

一、会員アンケートの実施(西村)
実行委員会(西村委員長ほか六名)が作成した実施案を検討、高齢化、活性化、若年層の育成、百周年記念事業など多数の意見が出た。一部手直しする。 承認
二、青年部K2登山(一九九六年)のビデオフィルム使用許可願(西村)
米国オアシス・プロダクションがナショナル・ジオグラフィック社より製作依頼を受け、日本のコーディネートーターを通じて使用許可願が出された。
(内容を確認中)

〔報告事項〕

一、北九州支部の設立(大塚会長)
九月二日、設立総会が英彦山国民宿舎で開催され北九州支部が発足、小倉副会長とともに出席した。

二、アルバータ二〇〇〇(大森副会長、増山、田邊)

①アルバータ峰登山隊は八月六日B C入り。アタックは多量の残雪と落石のため危険と判断し断念した。

②トレッキング隊は八十名参加、五パーティーに分かれて実施。一パーティーにカナダ山岳会のボランテイア五名が付き、行き届いたもてなしに全員満足した。

③登頂七十五周年祝賀行事は十八日ジャスパー国立公園、十九日イエローヘッド山岳博物館主催の記念式典、ジャスパーロッジ主催の記念晩餐会が開催され、大塚会長、竹内、大森、副会長、登山隊、トレッキング隊、カナダ山岳会、アルバータ州知事、ジャスパー国立公園長官、イエローヘッド山岳博物館長などが出席した。

④大塚会長と増山は帰途アメリカ山岳会を訪問し、ボザック会長と会談。

⑤九月二十六日、アルバータ二〇〇〇の打ち上げパーティー開催の予定。

三、絵画寄贈(鰐坂)

武井清会員から絵画「タムセルク」(三〇号)の寄贈があった。

四、カザフスタン訪問(宮崎)

カザフスタン登山協会の招待で、

宮崎、松原が八月十六日から二十一日まで訪問した。ヘリでハンテングリ、ポベイダのBCを訪ね、天山山脈を垣間見てきた。五、六千メートルの未登の無名峰が多数あり、キャンプの設備、食事もなく、日本からはソウル経由一日でアルマトイへ入れる。

五、名誉会員を囲む会(西村)

九月九日、会議室で開催。二十三名(名誉会員十二名)の出席があり、活発な意見交換が行われた。

六、エベレスト登頂記念行事(坂井)
年次晩餐会当日実施予定の準備委員会(大塚、平野、中村、坂井)事務担当を、計画案を決めた。

①シンポジウムのタイトル「JACが挑んだ世界最高峰への足跡」サブは「70エベレスト、80チョモランマ、88三国交差縦走そして現在」

②企画コンセプトは「関係者をパネリストに迎え登山の模様を映像とともに話してもらう。この三十年間、JACはどのように世界最高峰に取り組んできたのか、世界登山界の流れと対比し、変遷を明らかにする」

③シンポジウムは約二時間。パネリスト三名、コーディネーター一名。当時の登山用具を展示し、時代の変遷を見せる。予算案は九月中に財務担当に報告する。

六、名義後援、資料借用願(西村)

(七月理事会決定「審議事項の一部簡略化」に基づき総務担当理事が以下について承認した)

①北区飛鳥山博物館よりの「冠松次郎遺品資料一式」など四点、書籍七冊の貸し出し及び名義後援。

②BBSテレビより「河童橋上のウエストン卿ご夫妻の写真」など写真撮影並びに書籍掲載。

③富山県立博物館より伊藤孝一「雪の立山、針ノ木越え」など二点の山岳映画上映会の名義後援。

④IWASAKI ROCKISES FORUMより写真展「岩崎崇至、山の世界」の名義後援。

⑤東京都山岳連盟よりの「第八回長谷川恒男CUP」名義後援。

六、委員会報告

①新入会員オリエンテーションを九月三十日十四時より会議室で開催。

②インターネット小委員会よりホームページ作成状況の報告。会員、会員外のサービスをどこで区切るかが難しいという意見が出た。

財務委員会・村井(龍)

今年度の会計報告。他に特別出費百十万円(ネパールシバブリ四十万円、インターネット関連三十万円、その他四十万円)。

会報編集委員会・村井(葵)

九月は「法政OB山本俊雄氏の六

十三歳のチョモランマ登頂記」など。
海外登山基金委員会・坂井

昨年度助成対象のK2(隊長・山野井泰史)は、天候不順のため東壁を断念し南南東リブより七月三十日登頂。
高所登山委員会・坂井

海外連絡委員会と協同で進めていた、山岳四団体による「ヒマラヤ登山者アンケート調査」は千通発送し回答は三百五十一通、日本ヒマラヤ協会の集計作業が終了したので、四団体で協議の後、外部に発表予定。
当会負担費用は五万五千三百五十

四円(五月理事会承認済み)。
指導委員会・集会委員会・勝山

両委員会共催の「第一回スポーツクライミング体験講習会」を十月十五日多摩スポーツ会館内の人口壁で実施する。

山岳編集委員会・高遠

『山岳』二〇〇〇年(第九五号)目次の報告。

山研運営委員会・坂本

①八月末までの宿泊利用者が六百二十二人、昨年を上回っている。

②「山岳絵画展」は二百名が観覧した。

③一部団体利用者のマナーが悪い。
科学委員会・森

シンポジウム「登山者の立場から山のトイレ問題を考える」を、自然保護委員会と共催で十一月二十五日十三時三十分東京都高年齢者就業セ

ンター(JR飯田橋駅より徒歩五分)で開催。

図書委員会・宮下

十月二十七日、講演会「七十五年前と今日のアルパター」を今回トレスキングに参加した元会長・山田二郎氏を講師に開催。

自然保護委員会・河西

「山岳会」の森一構想に関する補助金申請(三百万円)に対して、(社)国土緑化推進機構より二百万円の補助金が決まった。

その他

①HATJが創立十周年を迎えるので、十月一日より一年間を十周年記念年とする。十月二十一日に記念祝賀会を開催。(神崎)

②越後支部は五十嵐支部長逝去により、室賀副支部長が来年五月まで支部長を代行する。(小倉副会長)

③ルーム年末年始の休みは十二月二十九日より一月八日まで。(西村)

■会員異動

物故

鈴木盛男(二一〇四五) 00・7・9

原健彦(二二二二二) 00・7・14

小野浩治(二二二九〇) 00・7・29

長谷川照子(八二二四) 00・8・22

徳永篤司(三八九八) 00・9・4

退会

本島禮子(二一八六八)

松沢哲郎(九三八五)

INFORMATION



イラスト・村上直温

◆「心に映る山々」写真展開催

アルパインフォトビデオクラブ

会期 十一月十八・二十七日

会場 西新宿「三省堂文化会館」エントランスホール(TEL・〇三・三三三二〇・二六一一)

◆本展終了後、十二月二日の年次晩餐会に全作品(五十点)を展示します。

*昨年開催した写真展の作品は「上高地山研展」を終え、以降巡回展として滋賀県・ダイニツクアストロパーク天究館で十二月末まで開催中です。

◆塔ノ岳忘年山行 99会

日時 十二月九日(土)・十日(日)

場所 塔ノ岳

集合 九日十七時大倉どんぐり山荘

申込 吉澤平治(Tel&Fax〇四四・九三三・五八五九)

◆「山の自然学講座」参加のお勧め

自然を勉強すると、自然保護への力が湧く、それがこの講座を始めた動機であり、目的です。すでに八年が経過し、講座の回数も百五十回を

越えました。その報告は、会報でも時々行っています。これからの計画のいくつかをご紹介します。一番参加していただきたいのが会員の皆さまです。申し込み者には申し込み書と長期計画書をお送りします。

連絡先 大森弘一郎(Fax〇四五・八三三・八五〇五)

予定講座 十二月九日、一月二十日

(環境パートナーシップオフィス会議室) 二月十・十二日(上高地)

二月二十四日、三月十日

ルーム日誌

9月

4日 総務委員会

5日 二火会 アルパインスケッチ(ク) アルパインスキー(ク)

6日 フォトビデオ(ク) アルパインスケッチ(ク)

7日 フィルムビデオ委員会 学生会

部 会員アンケート実行委員会

山 山の自然学研究会

8日 資料委員会

12日 常務理事会 自然保護委員会

アルパインスケッチ(ク)

95同期会

13日 理事会 会報編集委員会

93、97、99各同期会

14日 青年部 学生部 百年史委員会

18日 総務委員会 アルパインスキ

図書受入報告 (2000年8～9月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
ディームベリガー (著) 海津正彦 (訳)	K 2 嵐の夏: The Endless Knot	445pp/22cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
山と溪谷社 (編)	日本三百名山登山ガイド (中巻)	197pp/26cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
田部重治	旅・人間・自然	230pp/18cm	東京ライフ社	1957	宮澤美渚子氏寄贈
串田孫一	董色の時間 (アルプ選書)	226pp/18cm	創文社	1950	宮澤美渚子氏寄贈
長澤和俊	ネパール探究紀行 (角川新書 No. 185)	200pp/18cm	角川書店	1964	宮澤美渚子氏寄贈
山口清秀	踏跡	333pp/22cm	山口清秀 (私家版)	1979	宮澤美渚子氏寄贈
Harish Kapadia (ed.)	The Himalayan Journal (Vol.56, 2000)	276pp/22cm	Himalayan Club	2000	発行者寄贈
上田哲農	日髯の山ひなたの山 (平凡社ライブラリー No.ウ-12-1)	322pp/16cm	平凡社	2000	出版社寄贈
酒井敏明	旅人たちのバミール: 玄装、マルコ・ポーロはどの道を通ったか	336pp/19cm	春風社	2000	著者寄贈
堀文昭	面白い山・楽しい山	232pp/20cm	堀文昭 (私家版)	1999	著者寄贈
山と溪谷社 (編)	日本三百名山登山ガイド (上巻)	207pp/26cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
北山真 (編)	フリークライミング日本100岩場: 関東	141pp/22cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
山と溪谷社大阪支局 (編)	四国百名山	151pp/24cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
ハラエ (著) 長谷見敏 (訳)	白い蜘蛛 [新編] (ヤマケイ・クラシックス)	525pp/20cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
阿部幹雄	生と死のミニヤ・コンガ	317pp/ cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
山崎哲 (写真) スティーブス (解説)	世界のネコたち	191pp/29cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
堀公俊	日本の分水嶺: 地図で旅する列島6000キロ	270pp/22cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
田原一久	中国山地の四季: 田原一久写真集	71pp/25cm	東京新聞出版局	2000	出版社寄贈
石井光造	記念日の山に登ろう: 日付と標高が一致する山へ	223pp/19cm	東京新聞出版局	2000	出版社寄贈
小浜浩三	妻と二人の山歩き: 実践篇	222pp/19cm	光人社	2000	著者寄贈
水野勉	山書との対話	181pp/27cm	水野勉 (私家版)	1999	著者寄贈
Abhi Subedi	Ekai Kawaguchi: The Trespassing Insider	175pp/23cm	Mandala Book Point	1999	購入

日本山岳会報 山 666号

2000年(平成12年)11月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

ホームページ: <http://www.jac.or.jp>Eメール: jac-info@jac.or.jp

発行者 大塚博美

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社

■訂正 九月号(六六四号)五ページ三行目「天正十二年(一六八四)は(一五八四)の誤りでした。

30日 新入会員オリエンテーション 9月来室者 680名

29日 委員会 学生会 会員アンケート実行

28日 総務委員会 インターネット小委員会 フォトビデオ(ク)

27日 エベレスト三十周年準備会 アルパインスキー(ク) 学生会

26日 自然保護委員会 98同期会 ビデオ(ク)

25日 秩父宮記念山岳賞審査委員会 高所登山研究委員会 フォト

22日 インターネット小委員会 審査委員会

21日 科学委員会 青年部 写真展

20日 山研運営委員会 三水会

19日 集会委員会 百年史委員会 図書委員会 (一ク)